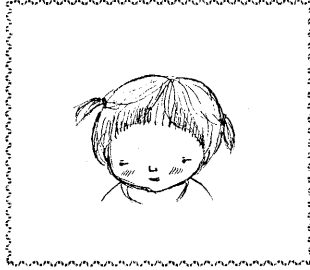


私の保育



太 田 茂 行

はじめに

以下の文章は僕が現実に職場でやり得ていることではなく、時々自分のやっていることを振り返った時に遠くの方にボーッと浮かんでくることが書いたものである。言わば、霧にかすむ遠くの灯台の光のようなもので、一体自分が少しずつでもその光に向かって進んでいるのかどうか、また、その光自体が幻にすぎないのかどうかも判然としていない。しかし、この光が幻であろうがなかろうが、僕がこの光を感じる以上は、これは今の僕にとって何らかの意味を持つものである。従って、今の僕はこの光に少しずつでも近づくように、何かにつけて努力するしかないのである。

(1)「保育の本質」私論

保育とは何か？ と問うことは、教育とは何か？ と問うことと根本において同じである。幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学、はたまた成人大学等の様々な「教育機関」と称するものがあるが、それらが担うべき使命は根本的

には一つである。

その使命とは、そこに集まる人間の一人一人に「生きていく」ということを「よりよく生きていく」に変える力を提供する場となる、ということである。一人一人の人生を、より充実した、より豊かなものとして行く機会と力を提供する場が、真の教育的環境なのである。より苦しみのない、より幸福な人生というものを目指せと言っているのではなく、逆説的だが生き生きと苦しむ力、不幸に対しても豊かに直面する力、姿勢を培う場であるはずだと言っているのである。

教育の意味をこのようにとらえると、教育などというものは学校が作られる以前から、「教育」という言葉の作り出される以前から、人間の生活するところには存在したはずだ。いや実際にそうなのである。例えば真赤に燃える夕陽に、一匹の蟻に、友人の一つの言葉に、見知らぬ人の小さな行為に、何かを「教えられた」、「心をふくらませられた」と深く感じる経験は誰にでもあるだろう。そういうことがまったく無いという人がいたら、その人はどんな「高学歴」を持っても真に無教育の人なのである。教育などというものは、人間の生活するところ、どこにでもいつでも生じ得る極めてありふれた自然な現象なのである。「よりよく生きていく」こ

とを人から学び、人が物から学び、人が自然から学ぶということは、本質的に家庭・幼稚園・学校等という区分とは無関係に生じる事実なのである。

さらに教育という現象の本質はあくまでも「学ぶ」という行為にあるのであり、決して「教える」という行為にはない。「教える」ことが意味を持つのは、その行為を通して「教える」側の人間が何かを学んだ時だけである。先生・教師・教授等と呼ばれる人種はどういうわけか「教える」ことに熱中し、結局自分自身を貧しくしていくことが多い。「家庭教育」・「幼稚園教育」・「学校教育」等と勝手な区分を作り、やれ、家庭では身辺の自立、幼稚園では六領域、小学校では国語に算数・理科・社会……等というのはまったく「教える」側に浸り切った発想である。そこでは本来「よりよく生きていく」ことを学ぶための一つ一つの方法に過ぎない事柄が達成すべき目的化され、子どもたちはアメとムチで追い立てられる。「教える」側の人間自身に「よりよく生きていく」ことを学ぼうとする姿勢・エネルギーが生まれない限り、彼は教育の場に際し、子どもに伝える何も持ち得ず、ただ本来は方法に過ぎないことを教育の目的とし、子どもからも真の学ぶ目的を奪い、結局子どもを巻き添えにしつつ自らの貧しさ

を深めるのではないだろうか。

さて、「よりよく生きていく」というのはある価値を指向することである。どんな価値を選ぶかは人により異なるし、またその本人にとっても自分が一体何を価値とし、何を求めているかはつきりしない、わからない、という場合も多くある。また、ある選ばれた一つの価値への指向は決定的なものではなく、時間の経過の中で変化しうるものでもある。しかし、この、ある価値を指向する、ということは、人間の健康な精神に共通した本能的要求とも言えることである。それは、「生きている」という現実の状態性を常に超えて、自分にとって内面的により充実したもの、より豊かなものを求めようとする極めて自然な内的要求なのである。

価値を指向すると言っても、それは倫理的価値、あるいは道徳的価値といったような抽象的なレベルのことではなく、もっとわれわれの生活感覚に根ざした日常的・現実的なことなのである。例えば、「この頃どうも自分の生活にハリがない……」とか「何となくダラダラと流されているようだ。何とかしなければ……」とわれわれが感じる時、われわれの内部に価値への指向性が芽生えているのである。また一人の子どもが「今日は何をしようかな……」と思いつつ、言葉に

ならない一種の期待感をもって幼稚園の門をくぐる時、その子の内部に価値への指向性が生まれているのであり、そしてその子が全身を打ち込む遊びに出会った時、その遊びを通してその子は一つの価値を実現しつつあるのである。

「よりよく生きていく」とことへの欲求は人間の精神の本質的なバイタリティーのようなもので、本来、老若男女を問わず有しているはずのものである。しかし不幸にも大人は人生での様々な試行錯誤の結果、とかく身体的にも精神的にも疲れやすくなっており、自らこの欲求に背を向けることが多い。したがってこのバイタリティーは、子どもの中に、その典型的な形で表わされると言える。そして保育の本質とはまさに、子どもたち一人一人の「よりよく生きていく」とことへの欲求・バイタリティーを豊かに育てていくことに他ならない。

ではどのようにして、この保育の本質を実現していくかを考える前に、保育の主人公である幼児とは一体何なのか、どんな存在なのかということを考えてみよう。

(2)「幼児の本質」私論

子どもは遊ぶものだ、と言われる。その通りである。道路で、公園で、幼稚園の庭で、ビルの階段で、電車の中で、駅で……と数えあげれば切りがない場所で、われわれは遊ぶ子どもに出会う。どんな遊びをしているか、ということになるとまさに数え切れない種類の遊びがそこに見られる。幼児の生活は遊びに始まり遊びに終る、と言って決して過言ではない。では、幼児の本質とは遊ぶ、ということにある、と言えるのだろうか。そうではない。それはあまりに皮相な、うわべだけの見方だ。遊びへと幼児を内面から駆り立てるもの、そこに幼児の本質があるのである。

一人の女の子が両手を大人に持ってもらい、グルグル回しを何度も何度もしてもらう。また、男の子二、三人が幼稚園の庭の片隅で、「こんどはしろ、砂を持ってこい!」「よし!」「つぎはくろ、砂だぞ」と言い合いながら泥団子作りに我を忘れて熱中する。こんなありふれた遊びを心理学的に見て、身体運動の快感とか、めまいの快感とか、また、創造の喜びの体験とか、泥をこねるという原初的感覚の快感等、いろいろ

に解釈・分析することもできるであらう。しかし肝腎なのは、一体何がこの子たちを遊びへと駆り立てているのか、ということをしつかり捉えることである。

幼児をその内面から遊びへと駆り立てるもの、それは全身全霊の躍動を求めるある衝動、自らをより豊かに、より充実したものにせざるを得ない一つのあくなき欲求である。そしてこれは先述した「よりよく生きていく」ことへの欲求に他ならない。先に、この欲求は本来は老若男女を問わず人間の精神が有しているもので、その原型とも言うべきものが子どもの中に見られる、と述べたが、幼児の本質とはまさに、この欲求を極めて率直、かつエネルギーな形で有していることにあるのである。

「よりよく生きていく」ということは、自分が今、ここにこうやって「生きている」という現実の一つの状態性を常に超えて、より豊かなもの、より充実したものを求め、そこに新しい自分を実現しようとすることである。一つの遊びに全身を打ち込んでいる子どもは、片時もじっとしていることがない。文字通りその子は一つの「状態」にいないのである。瞬間、瞬間に新しい自分を打ちたてているのである。イスに座ってじっと絵本に入っている子どもも、心を

躍動させているのである。刻々と新たに変わっているのである。

(3) 「保育を成り立たせるもの」私論

幼児の本質は、「よりよく生きていく」ことへの率直でエネルギッシュな欲求・バイタリティーにあり、保育の本質は子どもたち一人一人に内在するこの欲求・バイタリティーを育て、豊かにすることにある。では、一体何によってこのような保育が成立するのだろうか。それは「出会う」ことによつてである。

幼児は「よりよく生きていく」という欲求を意識したりはしない。この欲求は意識を超えて幼児の全身からほとばしり出るものである。それほどこの欲求・バイタリティーは幼児にとつて極く自然な、身近な、日常的なものである。そしてこれが自然なことであるため、幼児はそこに丸ごとの自分を投げ入れることができる。幼児はこうして、大人より遙かに容易に、あることに全身全霊を打ち込むことができるのである。ありのままの自分を差し出すことができるのである。言わば、彼は世界に対してためらわずに自己を開いているのである。これが幼児の基本的な存在形態である。

このような態度で世界（環境）に接する幼児は「出会う」のである。彼は一匹の虫に出会い、園庭にできた一つの大きなヘチマに出会い、取組み合いのケンカの中で友だちに出会う。出会うというのは、正面同志でガツンとぶつかり合うことである。お互いに丸ごとぶつかることであり、相手そのものの、相手の存在そのものを感ずることである。そしてこのことが、すなわち、相手そのものの、相手の存在そのものを感ずるということが、丸ごとの自分を投げ入れるもの、ありのままの自分を差し出すものへ贈られるものである。幼児は自から得たこの贈り物によつて、より豊かになるのである。

「よりよく生きていく」ことの喜びと励ましを得るのである。僕は、ある幼稚園で一人の男の子が「せんせい、ちよつと来て来て。すつごいものを見せてあげる」と言つて、僕を裏庭に突つたヘチマの下に連れて行き、「ね、すつごく大きいきゅうり、でしょ!! ほんとに大きいねえ。きょうはこんなの見れてほんとによかったなあ、ね!」と言つた時のことが、また、別の男の子が本当にガラガラした眼で、園庭に飛んできたトンボを素手で必死に追いかけていた時のことが忘れられない。彼等は絶対にあの時、一つのキュウリ（この時これをヘチマと言ひ正す必要は全くない）に出会い、一匹のトン

ポに出会ったのである。もしかするとそれ以上のもの、「自然」とか「生命」そのものと出会ったのかも知れない。そのことにより、この子たちの「生」がどんなに豊かに、充実したものになったか測り知れないほどだと思う。

保育の本質は幼児の「よりよく生きていく」という本質的な欲求を豊かに育てることにある。そしてそれは「出会い」により成り立つものである。換言すれば、保育の場とは出合いの場である、ということだ。そこにおいて幼児は物に、自然に、他の子どもに、そして「保育者」という大人に出会う。さて、「保育者」とは保育の場をセットする大人である。しかし「出会い」そのものは決してセットできるものではない。すなわち出合いの場とは、出会わせる場ではないのである。それはあくまでも、出会う場である。

したがって、保育者が準備すべきものは、まず第一に、泥、砂、水、植物、小動物といった自然的環境。第二に、使用用途の幅広い物品類。室内の机やイスや壁等も子どもたちが上に乗ったり、逆さまにしたり、絵をかいいたりして遊び道具に使う物と考えること。ブランコの立乗りはいけませんなどと「指導」するのは論外である。第三には、入園児を原則的に通園地域を決める程度の無作為抽選にすること。多種多

様な子どもがいることは、それだけ多彩な出合いを可能にするのだから。そして第四には——これが最も大切なことだと思ふ——保育者が自分自身の中に子どもと共に文句なく楽しむ心を培っていくこと。保育者自身が「よりよく生きていく」ことへのバイタリティーを失わないこと。以上のことが保育者が準備すべき最も基本的なことである。

本当の保育を成り立たせるものは「出会い」である。幼児は物と、自然と、他の子どもと、保育者と出会うことを通し、新たな、より豊かな、より充実した「生」を味わう。「よりよく生きていく」ことの欲求をふくらましていくのである。ところで幼児が体験するであろうこれらの出合いの中で、幼児にとってある意味で最も必要であって、かつ最もむずかしいのが保育者と出会う、ということである。

幼児はまだ独立した人格ではない。自分の支えを自分の中には持っていない。幼児の支えは基本的には母親であり、幼稚園では保育者である。だから、保育者との出合いは他の子どもとか、自然物とかとの出合いのベースともなるものである。この、幼児が保育者と出会うということをむずかしくする大きな理由が、保育者側に二つある。一つは保育者自身が「よりよく生きよう」とする欲求・バイタリティーを見失っ

ている場合であり、子どもといっても楽しめなくなっている場合である。すなわち、保育者が用意すべきものとして述べた第四の条件が失なわれた場合である。この時、保育者は自ら「出会い」に背を向けていることになる。

そして、もう一つは「保育の本質」の項で触れたことだが、保育者が保育の方法と目的を取り違え、「教えたがり屋」になっている場合である。この時、保育者には出会う気持ちはあるかも知れない。しかし実際には出会い得ない。なぜならこの時保育者は、子どもは自らの遊びを通して最も多く学ぶものだ、ということをおぼえているか理解していないから。一つの「お遊戯」を覚えるとか、五月には鯉のぼりの切絵を作るとかいうことは、保育の目的・本質ではなく、単なる便法に過ぎない、ということを理解していないからである。要するに、自分が教えたことばかりに注目して、目の前の子どものうちの一人一人が「今」「ここで」「何を」したがっているのか、ということに配慮しないのである。子どもたち一人一人から現実の流れ出ている「よりよく生きていく」ことへの欲求にフタをしてしまうのである。結局、自分では子どもに向かっているつもりでも、結果として子どもを遠くへ押しつけてしまうことになる。だから、子どもはこの保育者と出会

うことができなくなるのである。

これに対して、子どもが自ら遊んでいるところに入ったり、子どもに誘われて行ったりして、そこで共に楽しんだり、様々な子どもの気持ちを受けとめて、その時の自分ができるベストを尽そうと努める保育者は、子どもと出会うことができるのである。なぜなら、この時保育者は幼児の本質である「よりよく生きていく」欲求・バイタリティーにじかに触れ、それに応^{こた}えることができるからである。

一口に子どもと出会うと言っても、それは並大抵のことではない。子どもの気持ちを受けとめる、共感すること一つにしても、実に多くの場合がありむずかしいことだ。また、保育者には子どもの成長・発達に関して、以前の姿から近い将来の姿に及ぶ適切な洞察が必要とされることがある。その上、現実の保育の場は子どもたちの動きと共に、パッパッと変化し流れていく。また、われわれ保育者自身も常に元気はつらつ、という訳にもいかない。しかしこれらの大波小波に揺られながらも、それでもなお子どもとの出会いを求めて行くことがやはり大切なのである。それが本当の保育を成り立たせるものであり、われわれ自身をも豊かにして行くものなのだから。（日本総合愛育研究所・家庭指導グループ）